続・金谷健一のここが変だよ日本人の英語 第２回

金谷健一
岡山大学

今回は英語の発音を取り上げる．国際会議では発音が変でも意味が通じればよいし，英語国（英，米，加，豪）生まれ以外は皆なまりがあるから気にする必要はないという考えもある．それでもよい発音のほうが研究の評価や説得力にプラスになることは間違いない．

ただ，英語国に 10 年以上暮らしている人でも誤った発音やアクセントがなかなか直らないことを見ると，これは自覚しなければ決して進歩しないようである．前回取り上げた挨拶と同様に,「正しくなくても困らない」ことが進歩を妨げている．ここではそれを克服するための知識をまとめる．

1. 日本語のアクセント

外国人がなまりがあるのは，ネイティブが最初から正しい音を覚えるのに対して（地方や階級によっては “正しい” か疑問の場合もあるが），外国人は無意識にまず母国語の音律を用いるためである．そこで日本人はまず日本語の音律を知ることから始めなければならない．

日本語の音律は多くの日本人は知らないが（学校で教えないから），外国人向け日本語教本や放送アナウンサーの訓練マニュアルなどに書いてある．日本語アクセント辞典も市販されている．

日本語（標準語）は２段階の高低アクセントからなり，各単語は次の３パタンのいずれかである．

I. $\overline{\text{高}}|\underline{\text{低}\cdots\text{低}}$

II. $\underline{\text{低}}|\overline{\text{高}\cdots\text{高}}$

III $\underline{\text{低}}|\overline{\text{高}\cdots\text{高}}|\underline{\text{低}\cdots\text{低}}$

上下の線は高低を表す．$\cdots$ はその間一定の高さが保持される．このパタンは「第１音節と第２音節で高さが変化する」という特徴がある．だから**単語と単語の間で音程変化が生じ**，耳で聞いて単語と単語の区切りが識別できる．つまり，平坦にタンゴトタンゴノクギリガシキベツデキルというと単語と単語の区切りが識別できないが，$\underline{\text{タ}}|\overline{\text{ンゴト}}|\underline{\text{タ}}|\overline{\text{ンゴノ}}|\underline{\text{ク}}|\overline{\text{ギリ}}|\underline{\text{ガシ}}|\overline{\text{キベツ}}|\underline{\text{デ}}|\overline{\text{キ}}|\underline{\text{ル}}$ というから単語と単語の区切りが識別できる．

2. 英語の発声パタン

英語は文の冒頭は必ず高く始まり，ある音節で急速に降下し，直後に反発して次の単語の始まりの高音とつながる．辞書ではその急速に降下する母音の上に ´ が付けられ,「アクセントの音節」とも呼ばれる．だから音程変化は**単語の途中**で起こり，**単語と単語の間が連続的に発声される**．

しかし日本人は高い音から勢いよく話し出すのが苦手で，どうしても遠慮がちに低い音から始めるから，その時点でもう自然な英語にならない．低い音から始めると必然的に高い音に上げなければならないが，英語にはこのような上昇パタンは存在しない．その上，単語と単語の間で音程を変化させるので，音声が不連続になり，英語として非常に不自然である．

日本人は英語にあり得ない音声パタンで話しながら，自分は流暢に話していると思い込んでいる．それを聞く日本人も,「あの人は英語がすらすら喋れる」と感心する．これが不自然に聞こえたらヒアリングは既に日本人の域を越えている．

3. 日本語のアクセント移動

日本語の音律にはもう一つ著しい特徴がある．例えば「ビデオ」は $\overline{\text{ビ}}|\underline{\text{デオ}}$ だが，その後に「画

像」を続けるとビ|デオガ|ゾウとなり，ビ|デオ → ビ|デオと**下降音が上昇音に反転する**．これが日本語の「アクセント移動」と呼ばれる現象である．

これは日本語に美しい響きを与える機能であり，外国人の日本語が不自然なのはこの習得が難しいからである．しかし，これを英語に適用すると極めて不自然な響きになる．にもかかわらず日本人は無意識にこれを適用し，video image, computer vision, image processing のような 2 単語からなる名詞は必ず前の単語を上昇パタンで発音する．この癖は前置詞 (句) でも生じる．例えば日本人は by を単独の語としては全員正しく発音できるが，by ～ と何かが来ると，一音節の by を無理に 2 音節化してバ|イ と上昇パタンで発音する．through ～, during ～, using ～ などすべて上昇パタンになる．

これを日本人の注意すると，多くの人は意外な顔をして,「そのほうが “自然” ではないですか」と反論する．音声は先入観があると自分が信じているように聞こえるので，これを自力で発見することは相当困難である．

4. 外来語のアクセント移動

私には理由がわからないが，英語をカタカナ読みにするときに，日本人はアクセントのパタンを変えることが多い．

まず，第 1 音節にアクセントがある英単語を，日本語としては後方にアクセントを移動させることが多い．例：álphabet → ア|ルファベッ|ト，ásterisk → ア|ステリ|スク，hístogram → ヒ|ストグ|ラム．

これは「日本人にとって冒頭アクセントは発音しにくいから」とは解釈できない．なぜなら，逆に後にアクセントのある英単語を日本語としては冒頭アクセントにすることがあるからである．例：adréss → ア|ドレス，facsímile → ファ|クシミリ，Endéavor → エ|ンデバー（スペースシャトルの名前），consént → コ|ンセント，evént → イ|ベント，idéa → ア|イディア．

なぜ原音に逆らったパタンに反転するのか．私の想像では外来語だということを強調するために（そのほうが外国語らしく聞こえると思い）原語にない冒頭アクセントにするのではなかろうか．逆に，明らかに外来語のものは，それが外来語であることを目立たせないように（生意気に聞こえないように）原語からアクセントの位置をずらすのではないだろうか．

しかしその結果，英語で話すときも日本式アクセントが当てはまると勘違いして誤った発音になりがちである．注意が必要である [注 1)]．

5. 国際会議発表で間違えやすいアクセント

日本人が国際会議でアクセントを間違える筆頭はíntegrate であろう．私の経験では 99.99%の日本人が integráte と発音している．これは「積分する」という意味で理論研究によく現れるが（積分記号 $\int$ はíntegral)，異分野の知識や複数の手法を「統合する」という意味で応用研究でも盛んに用いられている．

先入観は恐ろしいもので，発表後の質疑でネイティブが “How do you íntegrate them?” と聞いているのに “We integráte them by ...” などと答えている．英語が “音” として聞こえないので，永久に気がつかないであろう．

冒頭アクセントの動詞は，日本人にとってアクセントが後ろにあるほうが “英語らしい” と感じるようである．同様のことがéstimate, cálculate, fórmulate, símulate, óscillate, fáscinate, súbstitute, cónstitute, órganize, súmmarize, fórmalize などでも起きている．～ate, ～ute, ～ize の形の動詞に間違いが起きやすいようだ．

6. 日本人が間違えやすい wa の音

日本人が間違えやすい筆頭は wa, war の音であ

る．これらは**ウォー**と発音され，**ワーではない**．例えば war（戦争）は**ウォ**ー（×ワー），warm（暖かい）は**ウォ**ーム（×ワーム），wall（壁）は**ウォ**ール（×ワール），walk（歩く）は**ウォ**ーク（×ワーク）である．このように古くから日本語として定着した外来語は正しい音を保存している．明治の先人はするどい耳を持っていたのであろう．

しかし最近はローマ字に引きずられた war ＝ ワーの表記が氾濫するので，日本人のほとんどが正しく発音できなくなっている．例：Warner brothers（**ウォ**ーナーブラザーズ，×ワーナーブラザーズ），warp（**ウォ**ープ，×ワープ），award（ア**ウォ**ード，×アワード），warning（**ウォ**ーニング，×ワーニング）．ゲームや漫画にも「時空のワープ」などが出てくる．このためネイティブが正しい音で問いかけても，先入観のために気づくことはない．

同様に wa も古いものは正しくウォと表記されていたが，最近では wa ＝ ワと誤って表記されることが多い．人名の Walter は**ウォ**ルター（×ワルター），Walt Disney は**ウォ**ルト・ディズニー（×ワルト・ディズニー）である．want の**ウォ**ント（×ワント），watch の**ウォ**ッチ（×ワッチ），wash の**ウォ**シュ（×ワッシュ）も正しい．

しかし人名の Washington（**ウォ**シントン，×ワシントン），Watson（**ウォ**トソン，×ワトソン），Watt（**ウォ**ット，×ワット）は誤った表記が流布している．だから「入れ換える」の swap（ス**ウォ**ップ，×スワップ），「保証」の warrant（**ウォ**ラント，×ワラント），「白鳥」の swan（ス**ウォ**ン，×スワン），「ワルツ」の waltz（**ウォ**ルツ，×ワルツ）もほぼ 100%の日本人が誤る[注 2)]．

誰がスワップなどと言い出したのだろう．部活にワンダーフォーゲル部というのがあるが（語源はドイツ語），「さまよう」は wander（**ウォ**ンダー）であり，ワンダーというと不思議に思う（wonder）．最も基礎的な be 動詞の過去形 was すら，**ウォ**ズなのに，ほとんどの人はワズと発音している．

7. その他のポイント

それ以外で気になるのは，日本人の cónsequence（結果），cónsequently（ゆえに）をそれぞれ コン|シー|クエンス，コン|シー|クエントリー と発音する癖である．séquence（列）の発音に引きずられたのであろうが，アクセントは冒頭にある．また sequ の部分は軽くシクまたはセクと発音する．同様に súbsequence（続き），súbsequently（続いて）も日本人は サブ|シー|クエンス，サブ|シー|クエントリー と発音する癖がある．

どうも日本人はíntegrate と同様に，冒頭アクセントが苦手のようだ．また冒頭アクセントではないが，represént（表す）の出だしの re ははっきりと**レ**と発音しなけらばならなにのに，ほとんどの日本人は リプリ|ゼ|ント と言っている．

また～ate で終わる語は動詞なら [～eit] と発音されるが，名詞や形容詞なら [～ət] となる．軽く**イット**といえばよい．しかし多くの日本人がエイトと発音している．例：「正確な」accurate [ǽkjurət]（アキュ**リッ**ト，×アキュレイト），「推定値」estimate [éstəmət]（エスティ**ミッ**ト，×エスティメイト），「親密な」intimate [ínt̀əmət]（インティ**ミッ**ト，×インティメイト），「情熱的な」passionate [pǽʃənət]（パッショ**ニッ**ト，×パッショネイト），「微妙な」delicate [délikət]（デリ**キッ**ト，×デリケイト）．

母音の e はアクセントがあればエと発音されるが，それ以外は軽いアとなる．例えばítem はアイ**タ**ムでありアイテムではない．その他éxcellent（エク**サラ**ント，×エクセレント），président（プレジ**ダ**ント，×プレジデント）など切りがない．これらはエを軽く発音すれば問題はない．アクセントのないエを常に弱く発音するように心がけよう．

一方，単独の a はアクセントがあれば [æ] また

は [ei] のどちらかであり，アと発音されることはない．例えば radius（**レイ**ディアス，×ラディウス），radiation（**レイ**ディエイション，×ラディエーション），radiator （**レイ**ディエイタ，×ラディエータ），radiance（**レイ**ディアンス，×ラディアンス）などの ra で始まる単語が誤りやすい．

その他，detérmine（ディター**ミン**，×デターマイン），polyhédron （ポリ**ヒー**ドラン，×ポリヘドロン），prédator （プ**レダ**ター，×プリディター）などの誤りにも気がつく．また ~some は単語によって読み方が違うことに注意．例：tíresome（タイア**サム**），chròmosome （クロウマ**ソウム**）．

これまで述べた日本人の誤りはすべて思い違いから生じているので，論文を読んでいて知らない単語が出くるたびに辞書の発音記号 注 3) で確かめるのがよい．

8. 原稿を読むと通じない

国際学会で最も重要なことは，決して原稿を読まないことである．これは昔から言われていることであるが，それでも原稿を読む人が絶えないのは，読まなければ言うことに詰まってしまうという恐怖心からであろう．それは理解できる．しかし，原稿を読んで何の解決にもならないどころか，かえってマイナスである．

原稿が文章として正しく書いてあるなら，それを配布して聴衆に読ませれば問題ないが，本人が読むと，まず人が聞いて理解できない．私も原稿を読んでいる発表を聞いて理解できないことを何度も経験した．正しい英語ならどんなに速く話されても理解できるが，発音の誤りや日本式の不自然な抑揚があれば，速く読まれると理解できない．理解できる限界速度はその発音のよさで決まる．

原稿を読む人は他人（ネイティブも）の英語能力を過信している．英語を読んでいるのだから，英語がわかる人はわかるはずだと思い込んでいる．しかし，自分では正しく読んでいるつもりでも，ほとんどの日本人は前述のような誤りを侵している．だからある速度以上では理解不可能となる．

一方，原稿なしで話すと，どんなに途切れ途切れでも，発音や表現に誤りがあっても理解できる．言葉とその人の思考速度が一致しているので，その思考が聴衆に伝わってくる．それを読み上げられると，たぶんこういうことを言いたいのだろうという解釈が追いつかず，何もわからないうちに終わってしまう．聴衆が馬鹿にされたようで非常に腹立たしく，反感を持つ．もちろん研究も評価されず，大変なマイナスである．

それに対して，どんなに英語が下手でも原稿なしでがんばれば非常に効果的であり，プラスの評価となる．ともかく努力して場数を踏むことである．それが必ず将来の進歩につながる．ぜひがんばってほしい． （続く）

注 1) 最近，テレビや新聞で computer graphics をコンピュータグラフィックと言ったり書いたりしているのに出会う．もちろん末尾の s は複数ではなく mathematics, physics, economics などと同じ学問名の s であり，これがないとおかしい．本会会員が間違えることはないと思うが，マスコミの影響は大きいので，やがて「グラフィック」が定着するかも知れない．

注 2) 辞書には例えば swan [swɑn | swɔn] のような発音記号が書いてある．前が米音で後が英音であるが，[ɑ] ＝アではない．[ɑ] も [ɔ] も日本語のアやオより口の中を大きく開け，**音はオに近い**．これは例えば not も同じであり，[nɑt | nɔt] である．日本語よりずっと口を大きく開けながら「ノット」と言えばよい．日本語のアは口をあまり開けないから，日本語式に「ナット」というと nut [nʌt]（豆）になってしまう．

注 3) そのためには発音記号の読み方を知る必要がある．中学や高校では教えないようだが，ぜひ覚えてほしい．ただし，発音記号を知っていても，それが表す音を正しく理解していない人が多い（[ɑ] ＝アの誤解など）．発音記号とネイティブの発音とを常に比較して記号の表す音を正しく理解することが大切である．